



日本プロレタリア文学集・36

プロレタリア戯曲集 2

日本プロレタリア文学集・36

プロレタリア戯曲集 (二)

定価 二八〇〇円

一九八八年 六月 三十日 初版 ©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 〇三三 四二三一八四〇二 (営業)

〇三三 四二三一九三三三 (編集)
振替 東京 三一一 三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・36

プロレタリア戯曲集

(二)

目次

長田秀雄	
銃殺された林少尉	九
西光万吉	
ストライキ	三五
冬の夜	四四
小林多喜二	
山本巡査	五七
福田栄一	
行方不明の工場長は？	七五

宮嶋資夫

機関室……………九

三好十郎

疵だらけのお秋……………二三

婦人よ、列へ！……………二五

小島 勲

群 盗……………二七

村山知義

暴力団記……………三三

東洋車輛工場……………三七

志村夏江……………三三

北村寿夫

怪しい貨物船……………四〇三

清水真澄

落した勲章……………四三一

富田常雄

農 旗……………四五三

佐々木孝丸

筑波秘録……………四九五

解 説……………菅井幸雄……………五三三

発表年月日と掲載文獻……………五五五

長
田
秀
雄

銃殺された林少尉（三場）

時

日露戦役時代。

処

南満洲。

一

明治三十七年六月中旬、晴れた午前——鳳凰城外の村落。師団司令部にあてた支那富豪の家の一部。石階、その上に石畳、奥に「師団長居室」の貼札。石畳には、支那風の卓、地図数葉、四五脚の椅子。屋根を支えた太い二本の柱に金文字の大聯がかかっ

てる。その前に衛兵二名。

幕僚二三名石畳の上の椅子によって話している。

幕僚一。どうも暑いね。

幕僚二。水浴でもするかな。

幕僚一。いや、後がたまらない。火熱^{はて}って……

師団長が上衣を脱いで出てくる。

師団長。君たちも上衣を脱ぎ玉え。

幕僚二。はっ。

師団長。いくらかしのぎいいよ。

幕僚一。じゃ、一つ御免こうむって脱^はごうか。

幕僚一同うなずく。立上って上衣を脱ぐ。

幕僚三。従卒。

従卒。はっ。

幕僚三。この上衣を何処かへかけて干しとけ。

従卒。はっ。（持ってゆく）

師団長。ところで、軍司令部の情況判断では、……
騾馬^{ろば}

集^{しゅう}附近に敵の大部隊がいるとにらんでいる。

幕僚二。自分もそう思います。

師団長。ふむ。（地図をみる）

幕僚二が地図の上を指さして示している。副官が出てくる。

副官。師団長閣下。

師団長。（地図を見ながら）おい。

副官。軍法會議の判士長が御眼にかかりに来て居ります。

師団長。（頭を上げる）此処へ。

副官。はっ。（去る）

幕僚三。林少尉の一件ですか。

師団長。そうだ。

副官が判士長をつれてくる。そして自分は石畳の端に直立している。

師団長。判士長。判決はどうなったろう。

判士長。はっ。やはり銃殺の刑に決定いたしました。この宣告書に御捺印を願います。

師団長。（受取って眼をとおす）してみると、林少尉はどうしても自説を枉げないのだな。

判士長。はい。

師団長。銃殺は何時決行するつもりか。

判士長。師団長閣下の御捺印がすめばすぐ施行いたします。もう、準備は整って居ります。

師団長。場所はい。

判士長。この司令部の裏の広場で施行いたします。

師団長。……射手は林少尉の部下の小隊から出したか。

判士長。はっ。第一分隊長以下十二名——司令部の門前に集合させて置きました。

師団長。……判士長。林少尉を鳥渡此処へ伴れて来い。

判士長。はい。（退場）

師団長。（幕僚たちに）元来は真面目な奴だよ。

幕僚三。そうらしいです。

師団長。とに角俺がもう一度説得してみよう。

幕僚二。それは結構です。（師団長が居室に入る。幕僚副官退場）

判士長が林少尉の縄尻を兵卒に取らせてつれてくる。

師団長は軍服の上衣を着て出てくる。

師団長。林少尉。

林少尉。はっ。

師団長。最後に俺は、もう一度君に訊く。どうしても、君の説を枉げる事は出来ないか。

林少尉。はい。

師団長。軍法會議は、君に帝国軍人として、最も恥ずべき刑罰を宣告しようとしている。これが、判士長の持ってきた宣告書だ——君が、自説を枉げなければ、俺はすぐこの書類に印を捺す……どうだ。林少尉。

林少尉。已むを得ません。

師団長。僕は君を惜しむ……君のような優秀な青年士官を自分の部下から失いたくはないのだ。

林少尉。師団長閣下。恩も恨もない個人と個人が、強いられた意思で殺しあわなければならないこの戦争を不合理とはお思ひになりませんか。

師団長。それは我々の国民の権利のためだ。

林少尉。権利……我々の国民は、むしろ平和な生活を衷心望んでいます。

師団長。（憤然として）よし、俺はもうこの上お前を憫む事は出来ない。（ポケットから印を出して、宣告書に捺す）お前は帝國軍人として最も不名誉な銃殺の刑に処せられるのだ。

林少尉。（顔色蒼白となる）……

師団長。判士長。（宣告書を渡す）

判士長。はっ。（進んでそれを受取る）

師団長。射手たちを此処へ呼べ。

判士長。はっ。（退場）

林少尉。（極度の興奮）師団長閣下。銃殺の理由をお聴かせ下さい。

師団長。生かじりの非戦論を唱えて軍隊の士気を害し、敵前に於て上官と闘争した重大な罪によってだ。

林少尉。（凝乎々と師団長を見つめる）では牛島中尉殿は……

師団長。牛島中尉には進退伺いを出させて置いた。

林少尉。それは不合理です。最初に軍刀を抜いたのは牛島中尉殿です。

師団長。それはお前の非戦論に憤激したからだ。

林少尉。（叫ぶ）自分だけ罰せられるのは、どうしても不合理です。

判士長入来る。

判士長。射手たちが参りました。

一人の軍曹に指揮されて、武装した十二名の兵卒が現われる。

軍曹。（低声に）左向け止れ。捧げ銃。

兵卒捧銃の礼。林少尉それを見てよろめく。

師団長。（挙手）御苦労だな。行って休息して居れ。

軍曹。はっ。（兵卒たちに）立銃。右向け右、前へおい。（退場）

林少尉。不合理です。どうしても不合理です。

師団長。判士長。林少尉をつれて行け。

判士長。はっ。（縄尻を取った兵卒に目くばせする）

林少尉。（曳かれてゆきながら、声をしばって）閣下。自

分は銃殺される理由はありません。不合理です。どうしても不合理です。……

師団長は陰鬱な表情で眞に火をつける。

副官が出てくる。

副官。師団長閣下。

師団長。何だ。

副官。（二枚の名刺を出す）日本軍事通信員代表として、この二名の新聞記者が閣下に御面会願いたいと申して参つて居りますが……

師団長。（舌打）面倒くさい奴等だ……今忙がしいからと云い玉え。

副官。はっ。（退場しようとする）

師団長。副官、仕方がない。会おう。此処へつれてき玉え。

副官。はっ。（退場）

やがて二名の觀戰記者をつれてくる。

師団長。（立上って）私が師団長ですが。……

記者一。初めて御眼にかかります。私は帝国写真画報社の村山愛川です。

記者二。私は太陽新聞社の特派記者、瀬川芳岳です。二人は日本軍事通信員の代表として、閣下に御願申したい

事があつて参りました。

師団長。まあ、おかけ下さい。（兩人椅子にかける）で、御用というのは。……

記者二。いや、他でもありません。私共の聞知しました処では、先日、前哨勤務中、同僚の牛島中尉と喧嘩をして、軍刀で切合つた林少尉は、本日処刑されるそうですが、もう、閣下は少尉の宣告書に御捺印なさいましたか。

師団長。（厳然として）捺印しました。林少尉は銃殺されるのです。

記者二。しますと、銃殺の判決理由とするところは、林少尉の思想ですか。

師団長。そうです。ああ云う思想を苟くも帝国の名譽ある軍人が公言して憚らないのは、怪しからん事です。

記者一。では、もう一つお訊ねします。相手の牛島中尉は、どう云う処罰をうけたのです。

師団長。牛島中尉には進退伺いを出させて置きました。

記者二。それだけですか。

師団長。それだけです。

記者二。……最初に軍刀を抜いたのは、牛島中尉だと云う噂ですが……

師団長。牛島中尉は、短気ではありますが、常に軍人の

本分を守っています。中尉の罪は林少尉の言葉に激して、少々過激な行爲をしたと云うだけです。

記者二。では軍律に抵触すると云う訳ではないのですな。

師団長。戦地の生活は平時と違います。牛島中尉にはよく訓戒を施して置きました。今度の罪の償ないとして、中尉には、此次の戦場で拔群の働をする事を誓わせました。

記者二。成程。

記者一。師団長閣下。

師団長。何です。

記者一。私もは処刑前の林少尉を撮影させて頂きたいのですが、お許し下さいませでしょうか。

記者二。そして、少尉の最後の感想がききたいのです。

師団長。折角ですが、それは、お許し出来ません。

記者一。押してお願したいのですが。

師団長。絶対にお断りします。それに林少尉は、今、処刑される所です。この一二分中に……

記者一、二。(殆んど同時に)本統ですか。

師団長。判士長の宣告がすむと、すぐ火蓋が切って放たれるのです。(時計をみる)

一斉射撃の銃声が大きく反響して響く。

記者一、二。(ギクリとして)あれは……(同時に師団長をみる)

師団長。(ガッカリしたように)あれが林少尉の殺された

銃声です。

沈黙。

記者一。(二に向って)では、君、せめて処刑の跡でもみて行こうか。

記者二。そうだね。

記者一、二。どうも御忙がしい処を有難う御座いました。では失礼します。

師団長。いや、折角お出でになったのに……私の許されている範囲でなら、何でも御相談に応じますから、また、お出で下さい。

記者去る。

判士長と軍医と射手たちが入って来る。

軍曹。(低声に)右向け止れ。捧げ銃。(捧銃の礼。師団長答礼)立銃。

判士長。只今林少尉の刑を終わりました。(師団長點頭)軍曹。(捧銃)自分以下十二名、これから中隊へ帰ります。

師団長。御苦勞であつた。林少尉は柔弱な西洋の思想にかぶれたため、軍人として最も不名誉な最後を遂げなければならなかつた。お前たちはよく林少尉の最後を胆に銘じて、国家の為に勇敢な軍人とならなければいけない。よし、帰つて休むがよい。

軍曹。捧げ銃——（師団長答礼）立銃。右向け右。前へおい。（退場）

師団長。（判士長に）処刑前の有様は何うだった。

判士長。非常に取乱しまして「不合理だ。銃殺は不合理だ。」と叫びながら、絶命いたしました。

師団長。（熱心に）ふむ——弾丸は何処にあたつたかね。

軍医。

軍医。三発命中しました内で、頭蓋の貫通銃創が致命傷でありました。部位は右の眉の一センチばかり上方です。

師団長。（感動）ふむ。や、御苦勞だった。帰つて休み玉え。

兩人。（挙手敬礼）はつ。（退場）

師団長。従卒。

従卒。（出てくる）はつ。

師団長。（時計をみる）もう午だ。まだ飯の支度は出来んか。

従卒。先刻閣下から連隊長以上会食の御命令が御座いましたから……

師団長。おお、そうだった——すっかり忘れて居つた、もう皆集まつたか。

従卒。大抵集まつてお出での方であります。

師団長。よし。では行こう。（立上る）副官。

副官。（出てくる）はつ。

師団長。今日の会食の俺の講話の原稿はもう書いてくれたかい。

副官。はい。こんな事でよろしいでしょうか。（原稿を出す）

師団長。ふむ。（読む）所謂非戦論について……君。一緒に会食場へ行こう。

副官。はつ。

師団長原稿を読みながら退場。副官後に従う。——衛兵二名捧銃の礼。

二

夜——荒廃した村落中の一民屋。壁が砲弾で破壊されている。白紙に「第十中隊事務室」と書いて、入